

# 和服構成における体型と縫製との関係（第7報）

——繰り越し量について——

羽 生 京 子

## I はじめに

和服を縫製する際に、一つの目安として利用されている標準寸法が、どのような体型の人々にまで適合するかを究明するとともに、より美しく、より簡単に着装しうる和服の縫製を追究することが本研究の目的である。

第1報<sup>1)</sup>より、衿肩明きの明け方、寸法の相違が衿つけ線および前面胸部に及ぼす影響を探ってきたが、衿肩明きを直線、曲線のいずれに明ける場合も、衿肩明き寸法と繰り越し量に深い相関関係があることを把握した。その関係を明らかにするために、直線裁ち衿肩明きについて、実際に繰り越し量を変化させて試着衣を縫製し、着装時には、肩線を肩山に合わせて自然に着装させて実験を行ったのが前回の第6報<sup>2)</sup>である。明き寸法は10cmと9.5cmの2種とし、それぞれについて繰り越し量は1cmから5cmまでを設定した。その結果、直線裁ちの場合は、繰り越し量の多いものは、明き寸法を小さくした方がよいのではという方向づけがなされた。このことは第5報<sup>3)</sup>で予測したことと合致する結果となった。

そこで今回は、曲線裁ち衿肩明きについて明き寸法と繰り越し量の関係を追究、検討することにした。

## II 着装実験

### 1) 着装実験に用いた和服スタン

スタンは、第1報110ページに詳細に記してあるものを使用している。

### 2) 試着衣の条件

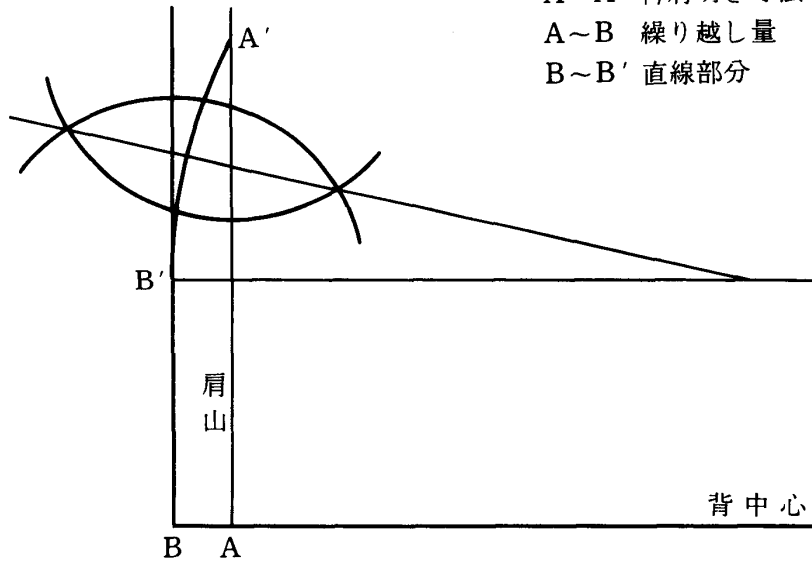
#### i) 試着衣仕立上がり寸法

仕立上がり寸法は、これまでと同じ、藤田とら著『改訂新版 和服裁縫』<sup>4)</sup>を規準として定めた。前報の直線裁ちでは、衿肩明き寸法を10cmと9.5cmの2種を採用した。しかし、今回

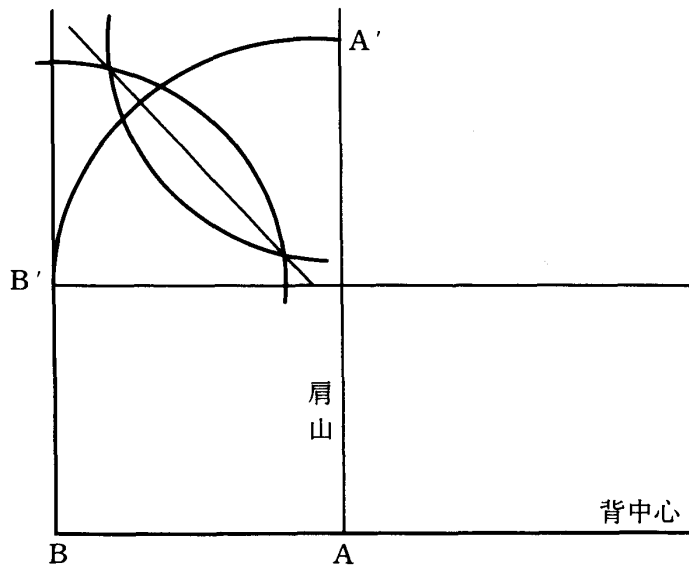
の曲線裁ちについては、第2報<sup>5)</sup>の着実験ですでは明らかなように、10cmの明き寸法においてさえも直線裁ちに比較して、衣紋はよく抜けるが、側面衿の交差角度が鈍角になり首に巻きつく結果となっている。このことから、10cmより小さくすることは不必要と判断し、逆に0.5cm大きくした10.5cmを採用した。なお、繰り越し寸法は前報と同じ1cm、2cm、3cm、4cmおよび5cmを設定し、衿下がり寸法も従来通り、肩山より21cmとした。

ii) 衿肩回りの衿のつけ方

{ I - 2 - o }

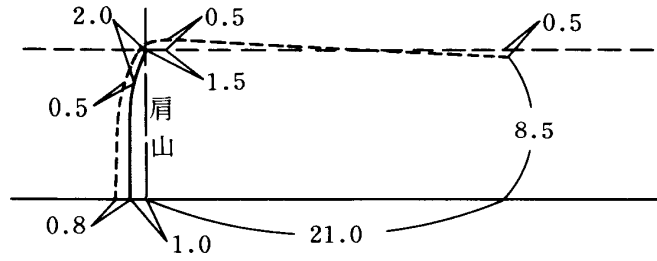


{ I - 2 - d }

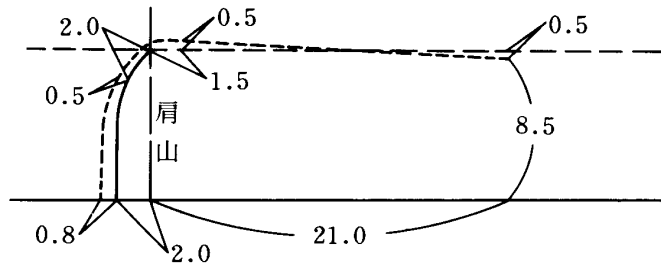


第1図 衿肩明きのあけ方

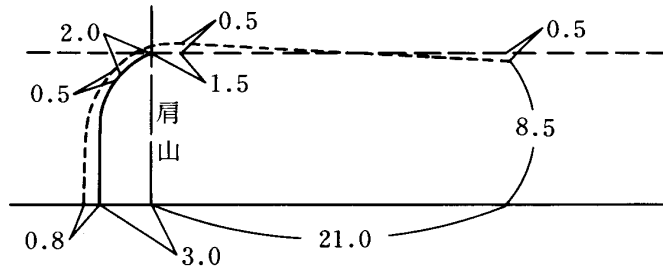
{ I - 2 - o }



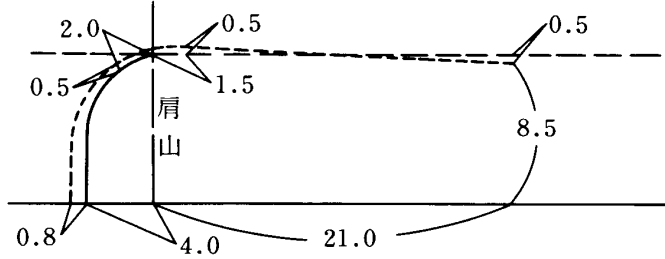
{ I - 2 - a }



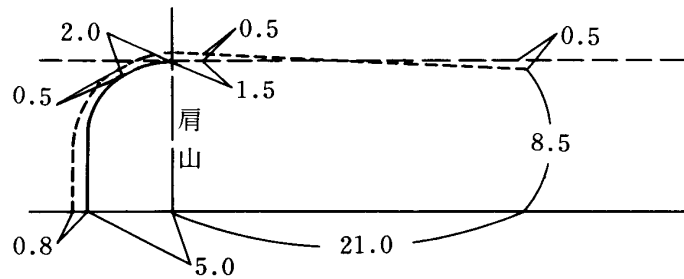
{ I - 2 - b }



{ I - 2 - c }



{ I - 2 - d }



第2図 衿肩明き位置、衿つけ標示 (明き寸法10cm)

衿肩明きの曲線の描き方は、第5報で報告した、阪本弘子編『新被服構成学』<sup>6)</sup>の「衿付け線の作図」を参考とした。作図例として、明き寸法10cmについて繰り越し寸法1cmと5cmのものを第1図に示してある。第5報で採用した3種の曲線の明け方の中で、背中心からの直線部分2分の1を採用したのは、第6報の直線裁ち衿肩明きについて、ほぼ好ましいと判断した2つの試着衣の計測値に比較的近い数値を示したことによる。

衿肩回りの衿のつけ方は、第5報の曲線裁ちの〔I〕と同じ条件とした。つまり背中心の三つ衿縫代は0.8cmとし、剣先位置では衿肩明き寸法より0.5cm減じたものである。この条件のもとに、明き寸法10cm、10.5cmそれぞれに繰り越し寸法1cmから5cmまでの10種の試着衣を作製した。これら10種の試着衣は分類上〔I-2-o〕、〔I-2-a〕、〔I-2-b〕、〔I-2-c〕、〔I-2-d〕、〔I-2''-o〕、〔I-2''-a〕、〔I-2''-b〕、〔I-2''-c〕および〔I-2''-d〕と区分した。第2図は10cmの衿つけの縫い方表示を図解したものである。なお、10.5cmのものは紙幅の関係で省略したが、衿肩明き寸法の違いから肩回りの曲線が多少異なるが目立つほどのものではない。試着衣の標示は、ローマ数字〔I〕は衿のつけ方条件を、アラビア数字(2)は曲線裁ち衿肩明き寸法10cm、(2'')は10.5cmを表わしている。また、アルファベット小文字は繰り越し量を示し、直線裁ちと同じく繰り越し量1cmを(o)、2cmを(a)、3cmを(b)、4cmを(c)、5cmを(d)としてある。

### iii) 試着衣の材料

試着衣の材料はこれまでと同じ、市販の縞木綿を用いた。明細は第2報62ページに示してある。

### 3) 着装の条件

試着衣の着装条件は、基本的に第1報と同じにした。ただし、今回は明き寸法と繰り越し量との関連を検討することを目的としているので、次の点に注意をはらった。肩線を肩山に合わせるために、側面衿つけ位置をまち針で固定することと、着崩れしない着装を考慮して、上下の衿つけ線をまっすぐに通した。従って、当然ではあるが前面衿の交差位置は、頸窩点より一定になっていない。

以上のような条件で、作製した10種の試着衣をスタンに着装させた。このスタンに5cm方眼の前に立て、前面、背面および両側面より撮影したのが第3図、第4図である。この写真を基にして8項目の計測をおこない、計測結果は156ページの「曲線裁ち衿肩明き計測値表」に示してある。なお、計測項目には撮影時の実測値も含まれている。

### 4) 実験結果

#### i) 衿肩明き寸法の違いによる比較

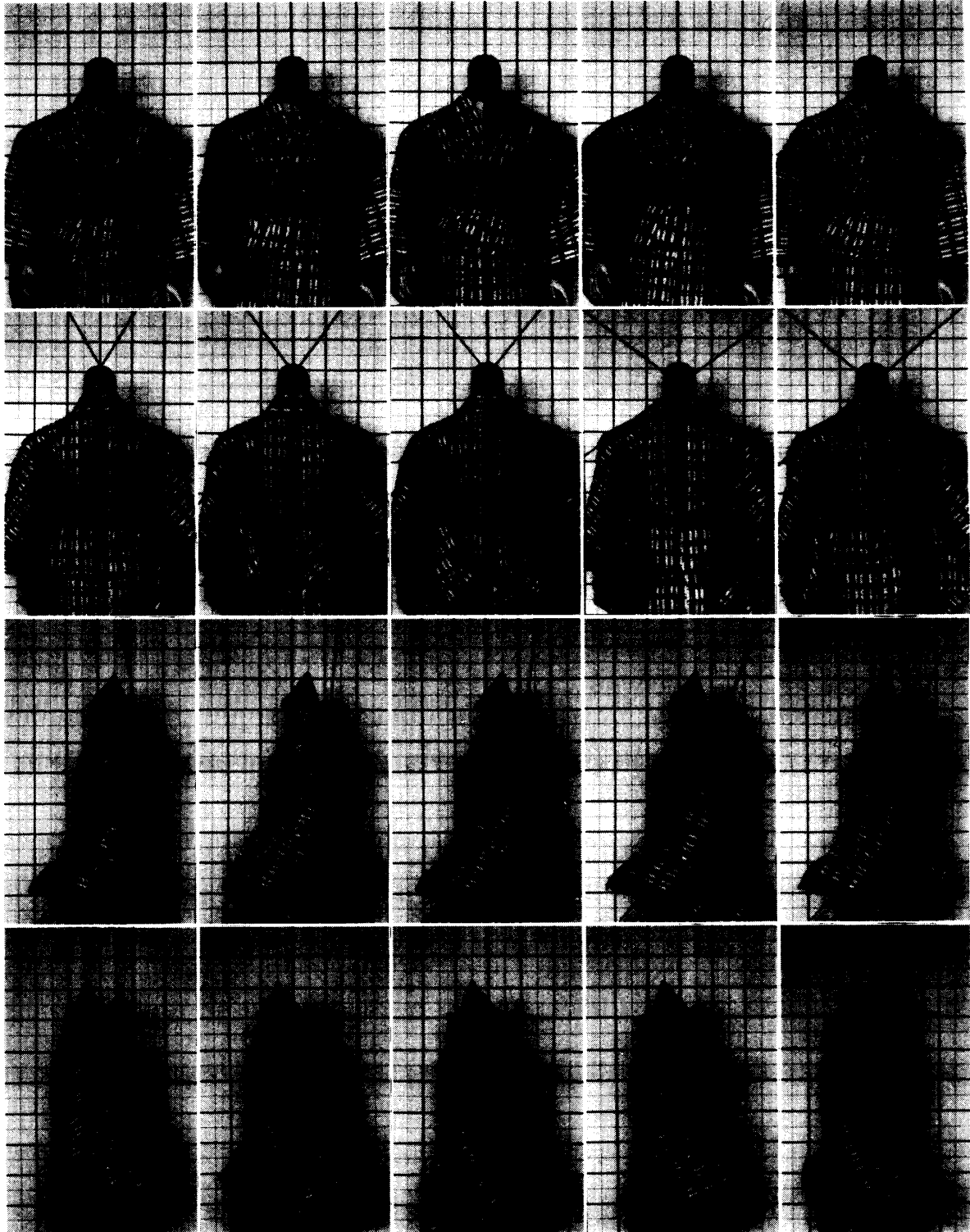
I-2-o

I-2-a

I-2-b

I-2-c

I-2-d



第3図 着装実験 前面、背面、左右側面

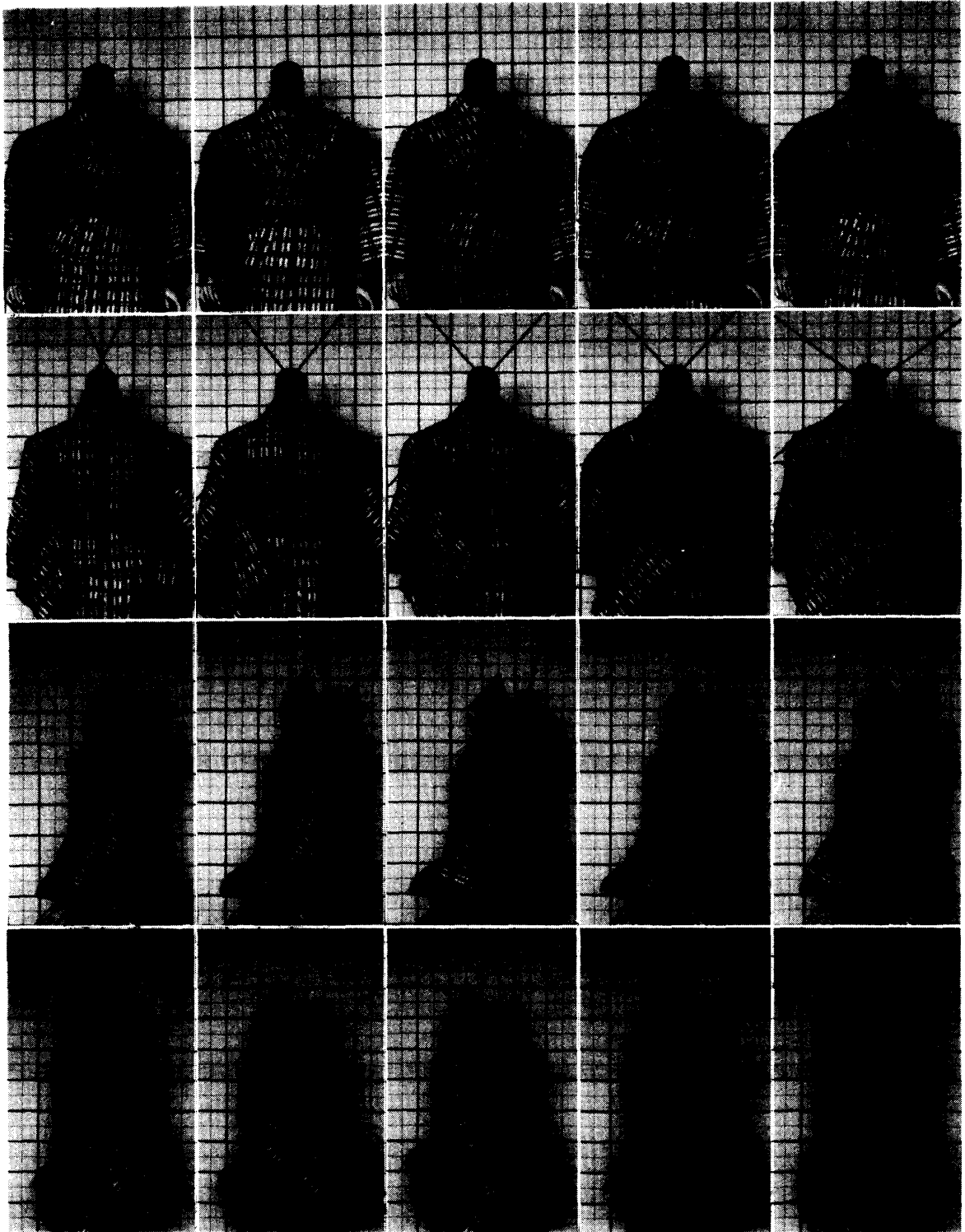
I-2"-o

I-2"-a

I-2"-b

I-2"-c

I-2"-d



第4図 着装実験 前面、背面、左右側面

この実験は直線裁ち衿肩明きの場合、繰り越し量の多いものは衿肩明き寸法を小さくする方がよいという指針を受けて、曲線裁ち衿肩明きでの明き寸法と、繰り越し量との関係を解明することを直接の目的としている。従って、まず、曲線裁ちによる衿肩明き寸法の違いについての比較を、第3図、第4図および計測値表と、実際に着装させた時の観察結果を交えて検討してみたい。

- イ 実験用に使用しているスタンに対して、繰り越し量を1cm（アルファベット小文字o表示）にした試着衣は、いずれも肩の厚みに対して、量の不足が目立ち、衿が首に巻きつくようになり、前肩にたすきじわが表れる。この現象は明き量の多い（2"）に極端に見られ、背面中央での首から衿山までの距離（計測項目1）の寸法が少ないのをはじめ、背面衿の傾斜角度、側面衿の交差角度などからも察知できる。
- ロ 前の衿の交差位置の高いのは、衿肩明き寸法10cmの場合は、繰り越し量2cm、10.5cmの時は3cmである。これは背面から撮影した写真でも明らかなように、第3図では〔I-2-a〕、第4図では〔I-2"-b〕において、衿肩明きを曲線に裁った効果が出ているといえる。曲線に裁った三つ衿が、直線に見えたり、まして山なりになるのは、繰り越し量の不足から、衿が首に巻きついた形、前に引かれたものと思われ、それだけ衿の交差位置と頸窩点との距離が大きくなる。また、あまりに多い量の繰り越しがあると、おのずから衿丈が長くなり、その量を背面で消化しきれず、側面に衿のゆるみが出来たり、交差位置を下げることになる。結果として言えることであるが、今回使用したスタンに対しては、衿肩明き10cmのときは繰り越し量2cm、10.5cmの場合は3cmにすると、繰り越し量が最も有効に、背面三つ衿の形を形成するといえる。
- ハ 第3図、第4図の背面三つ衿部分を比較すると、0.5cmの差をつくづくと感じさせる。明き寸法10cmでは繰り越し量が多いほど、いかにも丸く、衿肩明きを曲線に裁ったことが鮮明に表われている。これに対して、10.5cmのものは直線部分がはっきりとして、無理のない三つ衿の形が表現されている。これまで、衿肩明きの0.5cmの差がいかに大切であるかを追究してきた私たちにとっても、このように鮮やかな現象を把握したのは一種の驚きである。

#### ii) 直線裁ち衿肩明きとの比較

第5報において、衿肩明きの明け方について、「総じて、直線裁ちの場合は繰り越し量の多いものは、衿肩明き寸法を減じ、曲線裁ちのときは、繰り越し量に応じて、衿肩明き寸法を増すほうがよい」という推測を踏まえて、前回と今回の二度に分けて実験を行った。その結果を比較検討すると、次のような点が把握される。

曲線裁ち衿肩明き計測値表

計測項目 試着衣	計測項目								
	1	2	3	4	5	6	7	8	
I-2-o	2.3	-6.2°	16.7	10.3	59.5°	2.8	3.0	6.2	
	I-2-a	3.4	4.2°	17.5	9.7	70.0°	3.6	3.0	5.4
	I-2-b	3.8	6.3°	18.4	10.5	74.8°	4.2	3.0	6.0
	I-2-c	5.0	20.0°	23.8	11.9	103.0°	5.5	3.7	6.0
	I-2-d	5.2	21.5°	21.9	11.3	96.0°	6.1	4.8	8.8
I-2"-o	1.3	-14.1°	17.1	11.4	50.0°	2.5	3.0	6.5	
	I-2"-a	2.8	1.3°	17.8	9.1	74.0°	3.4	3.0	6.5
	I-2"-b	4.1	13.3°	19.7	11.6	81.2°	4.9	3.9	4.8
	I-2"-c	4.4	13.6°	22.3	13.1	83.8°	5.0	5.0	8.1
	I-2"-d	4.8	16.7°	24.2	13.0	105.8°	6.4	5.5	12.3

(計測項目)

1. 背面中央での首から衿山までの距離
2. 背面衿の傾斜角度 (頸椎点を通る垂直線に対して、衿が開いている方を正数とし、首に近いものを負数とした)
3. 背面の肩山での左右の衿つけ間の直線距離
4. 背面で左右の衿山間の直線距離
5. 側面衿の交差角度 (左右の衿つけと衿山を結んだ線)
6. 頸椎点から背中心の衿つけ線までの距離
7. 頸側点から衿つけ線までの距離
8. 頸窩点から衿の交差位置までの距離

ニ まず、同じ10cmの明き寸法のもの进行比较すると、直線裁ちは繰り越しが多くなるのに従って、頸椎点から衿つけ線までの寸法を伸ばし、繰り越し量5cmの場合には6.7cmと三つ衿縫代を加えても、まだ1cm近く下がり方が上回る数値となっている。これに対して、曲線裁ちの場合は背面中央での首から衿山までの距離が多く、背面衿の傾斜角度が大きい。つまり、直線裁ちは繰り越し量が体に添って、首から離れる方向に作用し、曲線裁ちは衣紋が抜けた形になる。

ホ 真直ぐに裁った衿肩明きが体に添って下がれば、おのずから衿は立ち、衿山間の寸法は広がり、側面衿の交差角度は、曲線裁ちよりも鋭角になる。

へ 直線裁ちのものを着装する際、繰り越し量の多いものは、肩回りの衿丈が多く必要



になるため、衿側面にゆがみが出来るのみならず、前面衿の交差位置が下がり、交差位置までの衿にゆとりが出て、体から浮いた形となる。すなわち、大変着装させにくい。曲線裁ちにすると繰り越し量によって、頸側点から衿つけ線までの距離も、前面交差位置も移動するが、衿が長過ぎて着装させにくいという感覚はない。

以上、3点について直線裁ちと曲線裁ちの相違をあげたが、これ等は衿肩明きの明け方による結果で、実際に証明したに過ぎないとも言える。第一に直線に裁った角を、いかに美しく丸みを持たせ縫ったにせよ、三つ衿の衿つけ線を丸く見せることは出来ない。明き寸法を大きくしたり、繰り越し量を増して首から離れれば離れるほど直線が目立つ結果となる。第二には、曲線裁ちの衿ぐりは先に記載したように、繰り越しを利用して、肩山に向かって弧を描く。従って、繰り越し量が多くなっても、その範囲内で処理されるが、直線裁ちの場合、繰り越し量は直接衿丈に影響する。第三に曲線に裁った衿肩明きに、真直ぐな衿布をつけるると自然に衿は立つ。これを着装すれば、衣紋が抜けることになる。このように自然な形で衣紋を抜くためには、曲線裁ちにするとよい。芸者や舞子の衣裳のように、衣紋を大きく抜く場合、繰り越し量を多くするのは勿論、昔は三つ衿をつけ込むという方法を用いて、現在の曲線裁ちに近い効果をあげている。

### III まとめ

衿肩明き寸法と繰り越し量との関係を、前回は直線裁ちとし、今回は曲線裁ちと二つの方法によって究明してきた。そして、直線裁ちにおいては、明き寸法10cmの時は、2cmの繰り越し、9.5cmの場合は3cmがよいとの結論を出した。また、今回の曲線裁ちの場合は、明き寸法10cmでは繰り越し量2cm、10.5cmの時は3cmにすると、繰り越し量を側面や前面に影響させることなく、衣紋を美しく出せることを把握した。この結果は第5報で予想した通りとなり、直線裁ちでは、繰り越し量を多くするには明き寸法を小さくする。また、曲線裁ちにおいては、繰り越し量とともに明き寸法も大きくするとよいという結果を得たことになる。それとともに、現在、標準寸法として記載されている衿肩明き10cm、繰り越し2cmが、どちらの方法で衿肩明きを明けても妥当であることが解明できた。

今回の実験で曲線で衿肩明きを明ける場合10.5cmにすると、背面三つ衿の直線部分がはっきりして、美しく見えることを発見した。また、繰り越し量を多くして、衣紋を抜きたい場合は、曲線裁ちにした方が容易に縫製することが出来るとの感触を得た。

これまで、和服を美しく着装する一つのポイントとして、衿のつけ方にしばって、標準寸法を軸に研究を進めてきた。そして、おぼろげながら、一つの方向づけを見いだしたように

も思われる。そこで今後はそれら研究を総合的に見直し、全体像を究明しておく必要がある。

〔付記〕

本研究を作製するにあたって、永野順子教授のご指導をいただき、和裁研究室の仲村洋子講師、山科みどり氏、伊藤瑞香氏のご協力をえた。

#### 引用文献

- 1) 羽生京子：和洋女子大学紀要24—2 P101～118 1983
- 2) 羽生京子：和洋女子大学紀要28 家政系編 P83～92 1988
- 3) 羽生京子：和洋女子大学紀要27 家政系編 P69～78 1987
- 4) 藤田とら：改訂新版 和服裁縫 光文社 1970 P36
- 5) 羽生京子：和洋女子大学紀要25—2 P55～81 1984
- 6) 阪本弘子：新被服構成学 相川書房 1984 P66

(本学専任講師)